

⑥ 京都大学大学院・文学研究科 編

『世界の中の『源氏物語』：
その普遍性と現代性』

(臨川書店)

今から一千年前に書かれた源氏物語。前半では恋に政治にと栄耀豪華を極める格好良すぎの源氏が、一方後半では人生の苦悩に満ちた中年男の源氏が描かれます。ビートルズの赤盤・青盤のように、受容する側の精神状態や人間的成長の過程に応じて惹きつけられる箇所が変わる、何度読んでも飽きることのない作品なのではないでしょうか。この源氏物語が世界各国語に翻訳されています。海外の人々にどう紹介され、どう受けとめられているのか、ちょっと気になる方に読んでいただきたい本です。

913.36||Seka (N.T.)

⑦ 中川 裕 著

『語り合うことばの力：
カムイたちと生きる世界』

(岩波書店)

アイヌ語学・アイヌ文学を研究している著者による「ことば」と「文字」の関係をカムイ(神)や口承文芸を交えながら適切に説明しています。語ることと書くことのちがひ、聞くことと読むことのちがひ、ことばに重きを置かずインターネットの文字の海におぼれ、あたかも知識を得たような気になり、ことばと文字が及ぼす影響力の判断もわからなくなってしまった現代人にとって、生きている表現豊かなことばを知り、語り合うということの本質を問い直してくれる内容です。

829.2||Nak (C. M.)



⑥ 武田邦彦 著

『ウソだらけ間違いだらけの環境問題』

(新講社)

著者は「環境問題」の定説とまったく異なる主張を展開する工学博士・武田邦彦氏。TV番組や出版物で武田氏の「環ウソ」論を耳にした人は多いのでは。

本書でも徹底して持論を披露、定説への反論に突っ走る力説ぶりや、饒舌すぎる論調に少々辟易するかもしれない。根拠となるデータの信憑性に疑問を感じないわけでもないが、やや概念として定着しつつある「環境問題」に、一石を投じるであろう。冷静に読んでいただきたい。

519||Tak (Y.S.)

⑧ 内藤道雄 著

『ワインという名のヨーロッパ：
ぶどう酒の文化史』

(八坂書房)

葡萄の木の祖先は6500万年前に遡り、自然に落ちて発酵を始めた葡萄から、えも言われぬ香味を見出した人類はワイン醸造を始めます。自然を崇める先史人は葡萄の木を母神信仰に結びつけ、イエスは葡萄やワインを譬え話や比喩に用いました。やがて宗教的意味をほぼ失ったワインは高利を生む商品として聖職者や貴族の財政を支える手段となるのです。葡萄栽培に適さない土地で上質ワインが産出されたのはなぜか。それは葡萄に魅了された人間が自然に立ち向かい努力し続けたからなのです。

588.55||Nai (A.U.)